平成31年4月7日　VoL.1110

社長の経営哲学の構築にお役立ちする

経営者への活きた言葉

税理士法人　優和

TEL０３－３４５５－６６６６
FAX０３－３４５５－７７７７

経営者への活きた言葉

事業家は「誰でもやれそうなものを事業にする」　稲盛　和夫（京セラ名誉会長）

１．誰でもやれる簡単なこと、それを事業にするのが事業家です。禅問答のようですが、誰でもできそうな、一見、事業でないようなことを事業にするのが事業家です。中小企業の仕事は、ハイテクでもなければ華やかな事業でもない。そのため、どうしても継ぎたくない、と内心思っていながらも後を継がなくてはならず、しょうがないから継いだというケースが多いと思います。

２．そのように、二代目、三代目の経営者は、あまりいい事業ではないと思いながら仕事をするので、自分の仕事に誇りをもっていません。そのため、会社が低迷するのです。後を継いだ事業が発展していくのは、「この仕事は大変いい仕事だ」「お父さんから素晴らしい仕事をいただいた」「この仕事を誇りに思える」と心境が変わったときです。そのときから、会社は様変わりしていきます。

３．事業というのは、そんなに派手なものではありません。立派そうに見える事業が最初からあるわけではありません。誰でもやれそうなもの、それを事業にするのが事業家です。

（参考：「週刊ダイヤモンド」2019 年 1 月 19 日号）

人事労務について

業績評価だけだと人は育たない

樋口武男（大和ハウス工業会長兼 CEO）

１．1970 年代初めは、住宅販売の売上棟数など業績で社員を評価する傾向が強かった。ただ業績を中心にして評価するうちに、目立つ人ばかりが昇進するのは良くないという声が出てきました。部長や課長になるには、人を動かし、育てるなど必要な能力があります。業績ばかり見ていると、そこがうまくいかない。

２．それで 1970 年代の途中から、指導力や育成力、協調性といったものを評価するようになった。また、2015 年度からは、「アクテイブ・エイジング制度」を導入し、65 歳になっても意欲があって、一定の業績が認められる人はさらに働けるようにしました。

（参考：「日経ビジネス」2019 年 2 月 4 日号）

経営者のための理念・哲学

苦があれば光もある

横田南嶺（臨済宗円覚寺派管長）

１．私は「この道より我を生かす道なし。この道を歩く」という思いで今日まで修行に臨んでいます。浄土宗の妙好人として知られる浅原才市（さいち）の言葉に、「海には水ばかり　水をうけもつ底あり　さいちには　悪ばかり　悪をうけもつ阿弥陀あり」があります。人生が苦痛に満ちているように見えるのは、それを支えている底がある。大いなるものに支えられているから、苦痛も感じることができるのだと言っています。

２．坂村真民先生の言葉に、「影あり仰げば月あり」という短い詩がございます。影というのは月があるから見える。我々が苦を自覚しているということは、必ずそれを支える底もあるし、照らす光もある、ということです。

（参考：「致知」2019 年 4 月号）

古典に学ぶ

克己心を持つ

（解説）悪いと知りつつ改められぬのは、つまり克己心の足らぬのである。余の経験によれば、習慣は老人になってもやはり重んぜねばならぬと考える。それは青年時代の悪習慣も、老後の今日に至って努力すれば改められるものであるから、今日のごとく日に新たなる世に処しては、なおさらこの心を持って自重して行かねばならぬのである。（参考：渋沢栄一「論語と算盤」）：国書刊行会